遊順小学林

平成三十年
お盆号

お盆の法要

左記のとおりお盆の法要をお勤め致します。万障繰り合わせの上ご参詣下さい。

七月十六日（月）
午後六時より

衆僧総供養読経

法話

お盆の期間
七月十三日より十六日
八月十三日より十六日

右記が一般的なお盆の期間となります。しかし土地によって期間の違いがありますので七月中旬より八月いっぱいまで、ご自宅、お寺でのお盆の読経を承ります。

尚、伺うお家が多いのでご希望の際は早めにご連絡ください。お寺にお参りになる場合も必ずご予約下さい。

初盆で無地の提灯を飾られた方は当日お寺に収めてくださいお焚き上げします

住職

あの地下鉄サリン事件から二十三年がたつ。当時オウム真理教の信者が発した「町の中のお寺は風景でしかなかった」という言葉に私をはじめ多くの僧侶が衝撃を受けた。お寺の存在の根幹が問われた。多くの真宗寺院は毎月定例の法話会を開き婦人会、青年会、子供会などそれぞれの寺が地域に根差して活動をしていた。しかしそれもこの言葉を発した人には届いていなかった。この言葉は未だに私の中で解決していない問題提議だ。ただ何年か前から森達也というドキュメンタリー作家の映像作品や著書に触れる中で気づかされたことはオウムのその人にとって寺（そこに住む僧侶を含む）は風景だったと、しかし私も彼、彼女をテレビの中の人達、つまり風景としか見ていなかったということ。彼や彼女もそれぞれ別個の人生の問題を抱えオウムに入信したはずだ。オウム信者と一括りにし、それを観ていなかった。

さて、お盆です。もとは四世紀ごろに中国で生まれた「盂蘭盆経」と日本の民族的宗教心が合わさって定着した日本独自の行事です。「盂蘭盆経」は目連尊者が餓鬼道に落ちた母親を盛大な供物を多くの僧に捧げその法力によって助ける物語り。また古来の日本人のメンタリティは民俗学者の柳田国男によると「先祖の霊は神となって子孫のために作物が豊かに稔ることを見守ってくれる、だから作物が採れたらそれを供物としてそれを祖霊神に捧げ、ともに喜びを分かち合って、これを共食し新しい年の豊穣を祈る。豊穣を祈るまつりはそのまま祖霊を祀ることになる」お盆の行事は七月十五日あたりですがこれは旧暦に当てはめれば現在の八月下旬です。早い地方ではこの頃には稲刈りが始まります。

飢饉が多発した時代、豊穣を祈ることは切実であり、作物が無事稔ることは大きな喜びでした。生まれてくるのも難しい時代、命を賜り苦しい中にも生きながらえていられることは文字通り「有り難き」ことであったのでしょう。

世間という大枠に視点を置けば、現代は飽食の時代です。また生まれることも当たり前しかも長寿の時代です。祖先が感じたような豊穣の喜びや生きていることの喜びを感じ難いのが現状だと思います。しかし、飽食も長寿も世間がそうだから私もそうだとはならないものです。

人間は野生の中では弱い故、集団を作り生き延びてきました。人類が発生して初期のころには種の存続のために個より集団が優先されることも当然ありました。しかし現代日本の環境ならば集団ではなく個を重視できるはずです。

ご仏前で合掌するとき、日本が、世間が、社会が、会社が、学校が、SNSがという集団から一度視点を外し、「私」はどうなのかと、仏となられた人が問うてきます。

住職　合掌

一日として同じだと思う景色はないんです。
必ず何か新発見みたいなものがある。
小さいことでもね。
本当に驚くことばっかりです。
ほかの人にとっての常識が、
わたしにとっては、
はっとするような発見なのです。

「ぞうさん」「ふしぎなポケット」「やぎさん　ゆうびん」「一ねんせいに　なったら」などの詩を書かれた、１００歳の詩人まど・みちおさんの言葉です。

私たちは日々を当たり前にすごしてしまい、多くの気づきを貰えるチャンスをもったいない事にやり過ごしてしまっているのではないでしょうか。

毎日、石神井公園で写真を撮り歩いていると、同じ景色、同じ陽射し、同じ風はないのに、同じにしかみえないようになってしまいます。この一瞬、今は二度と無いのだ、と知識では分かっていながら、そこに驚き、気付き、発見など見ることができないことが多いのです。角度を変えてみたり、近くで遠くで見たり、しゃがんだり、立ったり、あれやこれやしてみても、なにもピンとこない。ところが、諦めてボーと歩いていたら、なんかとてつもなくいい感じの景色に気付いたりします。それが、葉っぱ一枚であったり、クモの巣だったり、道端の小石だったり、カモだったり。それを見つけたときの感動と喜びは言葉では説明つきません。そして思うのです、毎日、毎時、毎秒、こうした感動を見過ごしているのだろうなと。

日々の生活の中で、ほとんどの時間は当たり前にすごしているのが実情だと思います。でも、時々でも、「あ！」という瞬間があると思います。それは他人から見ればどうでもいいことやなんでもない景色かも知れませんが、わたしにとっては掛け替えのない瞬間です。その時、わたしはその景色であったり、状況であったりに対して感動をしているのですが、その奥には、自分がここに在るという生命の事実に感動しているのだと思います。

私たちは感情の動物です。喜怒哀楽を捨て去ることはできません。喜怒哀楽をきっかけにして自己発見をしているのだとおもいます。

全てを見落とすことなく生きることはできません。

でも、フと、何か心をくすぐられたその瞬間を大事にして生活をしていきたいものです。

「朝（あした）に礼拝　夕（ゆうべ）に感謝」

昔は、多くのご家庭にこの言葉が書かれた張り紙を見かけました。朝夕に手を合わせましょう。朝、生まれたことに、夕、無事に過ごせたことに、感謝しましょう。そういう意味でもありますが、最近は、せめて朝夕に、できれば一回でも多く、立ち止まり、深呼吸をするつもりで、周りを見つめ、気づきをいただく、そんな時間を大事に日々を過ごしてください、という先達からのわたしへの願いなのではないかな、そんな風に捉えています。何も感じなければそれはそれ。でも、フと、何かに心が動かされることもあります。小事も気づきを経たら大事になります。副住職

実にいい加減な話だが本来がいい加減な性格なのでしょうがない。

私の妻は絶対音階を持っている。音階だけでなく五感に得るもの全てにきちんとした基準がある。何十年も前に買った服の色も覚えていてあの服にこれが合うとパッとコーディネートできる。娘の卯美美もそれに近いようで色彩に関して鋭い目を持っている。そんな家族の中でひたすらいい加減なのが私だ。音、自分でお経を勤めながらまず出だしの音に迷う。同じ音階を出しているつもりだがその時の喉の調子、鼻の調子、体調によって違う気がするし、聞いている耳の調子によっても違う。でも毎回その時のベストを尽くしているので多少前回と違っても許してください。そんな調子なので先日お寺の便器の便座の部分が壊れて取り替えようとサイズを測り便座を買って帰ってきたのだが、取り換えて見てびっくり。便座と下の台の部分と色が違った。何十年と見てきたのに勝手に薄緑の便器だと認識していた。が、実は薄い青だったのだ。でもサイズはぴったりだしそんなに違和感ないしまあいいか。むしろツートンカラーでおしゃれだね。　住職

住職からのお願い

今東京では火葬場が不足しています。皆さんご経験のとおり通夜葬儀の日程はお寺の都合より火葬場の都合が優先されてしまいます。その為ご法事の時間のお約束を頂いていても変更をお願いすることが有ります。葬儀をお勤めすることはそのお家の方にとって一生の一大事です。そこは相身互い、どうかご寛恕下さいますようお願い致します

定例行事　いずれもご自由にご参加下さい

聞法会　毎月2日夜7時から、「御文」のお話、座談会をやっています（1月、8月はお休み）

歎異抄を読み聞く会「微妙音」　毎月5日午後2時

十一月はお休みします

白色白光の会（婦人会）毎月第2木曜午後1時

お経（正信偈）の練習と法話と茶話会

「照久会」浄土真宗初めて講座　二月、四月、六月、十月、十二月の第2土曜午後2時より5時まで（参加費　2千円、照久会会員は千円）講師　聞成寺住職　佐竹貫裕師

仏像なぞり書き「仏像描くぞう」

第2水曜午後6時と月の最終日曜日午後3時から

参加費三百円（初回のみ別途テキスト代千円）